

[今回のフィールドワーカー]



才津 祐美子

Saitsu Yumiko

(環境科学部 准教授)

1969年長崎県五島市生まれ。1993年高知大学人文学部卒業。大阪大学大学院博士前期課程および後期課程修了。国際日本文化研究センター講師(研究機関研究員)、福岡工業大学社会環境学部准教授などを経て2008年より現職。博士(文学)。

世界には多様な文化や考え方があり、そんな異文化の人々の暮らしの中に飛び込み、人と関わり合いながら、未知の世界を調査・研究しているフィールドワーカーたち。今回は、合掌造りで知られる岐阜県白川郷で、どのように「文化」の継承が行われているかを見つめ続ける才津先生のお話です。

第3回 「文化」継承の現場へ

「文化」に優劣はないはず。しかし…

世界はもちろん、日本国内にも多様な文化があります。それぞれの文化の間には優劣や高低の差はなく、等しく価値があるものだという考え方に異を唱える人は少ないでしょう。しかし、その一方で、「世界遺産」や「文化財」に選ばれていると聞くと、それは「選ばれていないもの比べて」非常に価値が高いものだ」と感じる人が多いのもまた事実ではないでしょうか。それゆえに、こうした文化遺産は観光資源として多くの旅行者を引きつける役目も果たしているのです。

文化人類学の「基本のき」は、冒頭に述べた「文化に優劣はない」という考え方です。しかし、各地のさまざまな文化の調査に行くと、「うちの祭りは国指定の文化財だから、県指定の隣の集落のものより良いものらしい」といった話をたびたび耳にします。つまり、文化遺産保護制度がランキングのような役割を果たしているようなのです。また、「祭りの衣装を変えたのは文化財に指定されてから」というように、文化財への指定が変化のきっかけになったりしていることも珍しくありません。このような現状を目の当たりにして、「一体、いつ、誰がこんな制度をつくり、誰がどんな基準で文化遺産を選んでい



現場に飛び出せ!

躍動する
フィールドワーカーたち



合掌造りは、岐阜県と富山県の一部の地域にのみ見られる民家の形式。かつては1階部分だけを住居として使用し、屋根裏では蚕を飼っていた。



庄川に架かる「दैあい橋」。駐車場からこの吊り橋を渡ったところに荻町地区がある。

るのか？」という素朴な疑問が私の中に浮かんできた。以来、制度の成立・普及と地域社会の影響の両方を追うことが研究のメインテーマとなって、現在に至っています。

世界遺産「白川郷」へ

現在、文化遺産ランキングの頂点に在るのは、やはり「世界遺産」でしょう。私がメインの調査地になっているのも1995年に世界遺産に登録された「白川郷」（世界遺産としての名称は、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」）です。白川郷は現在の岐阜県大野郡白川村荻町地区を中心とした地域で、約60棟の「合掌造り」と呼ばれる民家が現存しています。白川村の現在の人口は約2,000人、荻町地区は約600人です。荻町地区は1976年に国の文化財である「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。「伝統的建造物群」とは、「周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの」とされています。これによって、合掌造りの建物だけでなく、荻町地区全体が文化財として保護されることになったのです。そしてこれが世界遺産登録につながっていきます。

私がこの白川郷を調査地として選んだ理由は、白川郷が合掌造りという「普通の人々の家」を中心とした文化遺産だからです。もちろん今でも人々はそこで暮らし続けています。その暮らしの中で、白川郷の人々は具体的にどうやって文化遺産を継承しているのでしょうか？また、文化遺産保護制

度は彼ら／彼女らの暮らしにどのような影響を与えているのでしょうか？

こうした調査をするために私が最初に取り組んだのは、荻町地区の人々の生活そのものを知ろうとすることでした。例えば、荻町地区では毎年秋に白川八幡神社のお祭りが行われるのですが、この準備は1月の「どぶろく」（神様に奉納するお酒）の仕込みからはじまります。まずはそれに参加してもらいましょう。その後もお祭りの裏方を担当する「カギトリ」と呼ばれる当番にあたった「組」の皆さんのさまざまな活動に1年間を通して参加しました。「組」というのは、10〜30軒程度の近隣の家々が構成された組織で、現在は地区内に7つあります。同じ組に属する人々は、祭りの他、結婚式や葬式、茅葺き屋根の葺き替えの時などにも助け合う関係にあります。荻町地区では、この同じ組に属する人々との関係と、親戚付き合いが生活上の基本的かつ重要な人間関係となっています。このような密度の濃い人間関係を維持していることが、合掌造りのみならず地区全体を保存するためのベースになっていると考えられます。

また、夏休みいっぱい合掌造りの民宿で働いたこともあります。本当は荻町地区に家を借りて住みたかったのですが、残念ながら賃貸してもらえなかったのです。こういう形をとって少しでも長く滞在しようとしたのでした。私が想像していた以上に民宿の仕事は過酷で、朝から晩まで働きました。よって、当初の予定（民宿を拠点に外に聞き取り調査に行こうと思っていた）とは違って、ほとんどの時間を民宿の中で過ごしましたが、民宿のご家族と寝食を共にすることで、決して



荻町地区は周りを緑豊かな山に囲まれた小さな盆地。合掌造りの家々は、深谷の強風を受け流すため、みな南北方向に建てられている。



30〜50年に一度行われる茅葺き屋根の葺き替え。かつては「結」とよばれる住民相互の無償労働で行われていたが、現在は地元の専門業者に依頼することも多い。



毎年10月14、15日に行われる白川八幡神社の「どぶろく祭り」。神様に奉納する「どぶろく」の仕込み（大量の米を洗い、蒸し、麴を混ぜ、樽に入れるという作業）は、1月に住民自身の手で数日かけて行われる。

どぶろくが振る舞われる中、奥の社殿では、民俗芸能の春駒踊りが披露されている。



「お客さん」ではわからない、荻町地区の等身大の暮らしを学ぶことができたように思います。また、合掌造りを保存するために民宿として活用している家が多いので、その実態調査にもなりました。

このような調査方法は一見遠回りに見えるかもしれませんが、なぜ知りたいことだけを直接インタビューしないかと思う人もいるでしょう。しかし、文化人類学では現地の人々の視点で物事を見ることを大切にしています。つまり、「荻町地区の人々にとって『文化遺産(保護制度)』とは何なのか」を知るためには、現地の人々の暮らしに寄り添う、こうした調査方法が必要不可欠なのです。

「文化遺産」への道のりとその代価

荻町地区に通い続けてわかってきたのは、文化遺産を継承することの難しさでした。

1950年代以降、ダム建設による水没や、村外売却(料亭などとして使用するため)や、瓦屋根の家への建て替えなどによって合掌造りの数はどんどん減っていきました。このような状況に危機感を募らせた荻町地区の有志が合掌造りの保存に乗り出しました。その動機は失われゆくものへのノスタルジーだけでなく、合掌造りの保存と観光資源としての活用をセットにし、「合掌造りで食べていけば」という思いからでした。そして1971年、同地区の人々でつくる「白川郷荻町部落の自然環境を守る会」が発足しました。この「守る会」の主たる活動の一つが合掌造りの文化財化であり、1976年

に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたのはその成果だったわけですが。こうして荻町地区では合掌造りの文化財としての保存と観光資源としての活用を両輪とした生活がはじまったのです。

しかし、周囲の環境を含めた地区全体を文化財として現状維持するためには、さまざまな規制がかけられます。自分の家も庭も畑も自分勝手には改変できないのです。また世界遺産登録後は観光客数が急増したのに比例して観光業を営む人も増え、景観の変化(「悪化している」という研究者も多い)が指摘されるようになりました。さらに、マナーの悪い観光客とのトラブルも絶えません。こうした中で、荻町地区の人々は、文化遺産の保存／観光資源としての活用／日常生活のいずれを優先させるか悩みながら暮らしています。

文化財や世界遺産というお墨付きをもらうことは、大きな観光資源を手に入れることになりませんが、一方で、その所有権の一部を切り売りするような側面があります。極端な言い方をすれば、世界遺産ならば、全世界の人が「人類共通の遺産だ」と主張することを可能にさせます。そして周囲のさまざまな意見に振り回されることにもなります。しかし、私は文化遺産の直接の担い手がどこまで主導権を握り続けていられるかは、あくまでも担い手自身にかかっていると考えています。

自らの文化をどう継承していくのか。その答えは容易には出ませんが、悩みながらも継承していくその現場に立ち会いたくて、13年目の今もお私は白川郷に通い続けるのです。



プライベートな居住空間を遠慮なく覗くマナー違反の観光客も少なくない。



世界遺産登録後は、大勢の観光客で賑わうようになった。現在、年間約170万人が訪れる。



ほぼ毎日大型観光バスや自家用車で混み合う「せせらぎ公園駐車場」。



合掌造りが建ちならぶ荻町地区。民宿や土産物店を営む家も多い。



観光客のマナー違反の対策として「白川村ポイ捨て等防止条例」も制定された。